



コケシを使っ  
てもう一度

kakasi

猫が鳴いています。夜中に猫が鳴いています。そしてまた鳴いています。小百合は布団の中でその声を聞いていました。中々眠れません。眠れないと昼間の出来事が思い浮かんできます。それは佐竹さんの事です。佐竹さんは会社の人です。食品会社の正社員です。年は40代半ばで独身らしいです。詳しくは知りません。知りたいとも思いません。それ程魅力が無いからです。見掛けはテレビや映画に出て来る悪役顔の怖い顔です。人を一人か二人殺していてもおかしくない顔です。人を顔で判断してはいけないと思いますが話をしたくない顔と言うのはどうしてもあります。人は見かけじゃ無い。中身だわ、きっとそうだわ、でも話をする気になれません。佐竹さんは仕事出来るタイプでもありません。ちよろちよろ動いていますが何をするか判っていないみたいです。もう正社員で何年も働いているのに同じ所をぐるぐる回って同じ失敗を繰り返しています。どうしてこの人が正社員なのか不思議に思います。正社員に見えないのです。私は派遣社員なのに佐竹さんより働いていると思います。離婚してこの仕事を失ったら幼い娘を抱えてこれからどうやって暮らして行けば良いか判りません。派遣社員は会社の業績でどうなるか判りません。仕事が暇になれば会社が休みになり忙しくなれば娘の保育園にも迎えに遅れます。資格を取ろうにも時間と金銭の余裕はありません。私の母親は一人で遠く離れて住んでいます。今まで住んでいる土地を離れたくないと言っています。母は私に派遣の仕事ならこちらにもあるから一緒に暮らそうと言っています。私は悩んでいます。私が悩んでいるらしいと佐竹さんが知りました。佐竹さんは仕事をしている時は隅っこで小さくなって仕事をしているのですが休憩時間や仕事が終わると急に態度が大きくなります。仕事中は仕事の事を聞いてもまともに答えられずに曖昧に答えるのですが仕事以外の事になるとしゃべります。特に女の人の話題が大好きです。会社内の女性の事を良く知っているみたいです。私はその佐竹さんの目標になったみたいです。佐竹さんは私を好きみたいです。

猫の声がうるさい。何処で鳴いているのだろう。ここは団地の3階です。この団地では犬や猫を飼ってはいけません。猫の鳴き声は小百合の玄関から聞こえてくるようです。何故？小百合は目覚まし時計を見ました。時刻は午後十一時になろうとしています。小百合は睡眠の邪魔をされ少し怒りを覚えました。明日は朝7時には家を出て一人娘のみつ子を託児所に預けなければなりません。小百合は隣で寝ているみつ子を見ました。昼間の遊び疲れでしょうか、3歳になるみつ子は静かな寝息

を立てています。その寝顔を見ると気分が少し安らぎます。離婚して1年になります。別れて新しい仕事を見つけなんとか生活しています。みつ子だけが小百合の生き甲斐です。この子の為にも頑張らなければと思います。でも女手一つで成長するまで育て上げられるか不安です。小百合はみつ子に布団を掛け直しました。猫の声は止みません。やはり玄関先から聞こえてきます。家の中？まさか、小百合は布団から出て鳴き声の元を探しに行きました。2LDKの団地では猫は直ぐ見つかりました。茶色い毛をした猫がトイレのドアの前で鳴いています。猫は小百合を見るとニヤリと笑いました。そしてトイレのドアに爪を立てました。「駄目、止めなさい」小百合の頭の中に団地の修繕費が横切りました。生活が苦しいので余分な事にお金を使いたくありません。何処から来たのかしら、小百合は猫を捕まえようと思いました。小百合が手を伸ばすと「ドアを開けなよ」と猫が言いました。「開けないとドアに傷をつけるぞ」猫なのにパワハラをしようとしています。小百合は猫のパワハラに対抗する為に睨みつけてやりました。「俺のはハラスメントじゃない。だって猫だから」「あなたが許されると思うの、出て行きなさい」「許すも居留守も紙一重、表と裏は心のひだ。陽だまりがあって影がある。あつてない物が金と人情、とかく人の世は生きにくい、後はどこで納得するかだ」「猫なのに偉そうに」「だって猫だから」猫はドアを開けトイレの中に入って行きました。すると「間もなくドアが閉まります。お急ぎの方はお早くお乗り下さい」とアナウンスが聞こえてきました。「えっ何？」小百合が思う間もなく大勢の女性達が走ってきました。「駆け込み乗車はおやめ下さい。止めろ止めろって言っているのが聞こえないのか」アナウンスの言葉を聞かない人達に背中を押され小百合はトイレの中に入りました。「一体何？誰なのあなた達は」「ドア閉まります」アナウンスと共にトイレのドアは閉まり小百合は見知らぬ人達と一緒に閉じ込められました。「発射します。字を間違えました。発車します」満員のトイレは動き出しました。「何処へ行くの、あなた達は誰？ここは私の家よ」小百合は叫びましたが誰も答えてくれません。誰も目を合わせてくれません。女の人達は上は60過ぎから下は10代後半までいます。無視、虫の居所が悪いの？それは私の方だわ、ここは私の家だから私が正しいに決まっている。「出て行って下さい」小百合の言葉に便器に座っていた20代後半の女性が立ち上がりました。親切そうで話を聞いてくれそうです。小百合が話かけ様とすると「どいつもこいつも皆俺様に穴の穴を見せに来たのかい」便器がしゃべりました。近頃の便器はしゃべりますがこんな下品な便器はありません。セクハラもはなはなしいです。作れば会社に抗議の電話が殺到し女御皇位あまたさぶらいけるば

かりで話にもなりません。「俺は言いたい事を言うぜ、何故なら俺は社会に絶対必要だからだ。嘘を付く必要は無い。あんたも俺に穴の穴を見せに来たのかい」小百合はセクハラに腹を立て便器の蓋を閉めました。「そんな事をされたら身も蓋も居所もなく四の五も言えなくなる」「ろくでなし」「七転び八起きで帰ってきました。九はどうする？」「なんでこうなったの？夢」「夢は見る物それともかなえる物」「便器に何が判るの」「うんこ！」小百合は便器のコンセントを抜き蓋を閉めました。なんて下品なんでしょう。一般社会では通用しません。小百合が許してもテレビや新聞出版社が許しません。道徳やら常識の正義の鉄拳を振りかざして世論を誘導しようとするはずです。小百合は自分を世間一般と同じだと思っているのでした。「犬はうんこ好きだけど旧日本軍が敵の軍用犬を」再び蓋を開け便器がしゃべりました。小百合は聞きたくないので便器の蓋を閉めその上に腰を下ろし便器を黙らせました。トイレは電車の様に揺れています。小百合は座りながら他の女性達を見ました。家のトイレはこんなに広がったかしらと言うほど人がいます。トイレの中は身動き出来ません。それでも立って化粧をしている人もいます。上半身の肉を胸に集めている人もいます。小百合はそれらの人を見て自分がパジャマ姿と気付きました。何処へ行くの？何処に行くとしてもパジャマ姿では常識人と思っている小百合の心が許しません。それが夢だとしてもです。せめてジャジーかスウェットだったらコンビ辺りに行けるのにそう思っても後戻りが出来ないみたいです。小百合はトイレの窓から外を見ました。外は暗闇でした。暗闇の中に一本だけのレールが青白く光っていました。何故一本だけなの？JR？私鉄？小百合は考えても考える材料はありませんでした。「何処へ行くの誰か教えて」小百合は誰とは無しに聞きました。すると小百合と目が合った老婆が入れ歯を外して笑いました。「私にはこれがあるからまだまだまだまだ捨てた物じゃないよ」老婆は言いましたが小百合には何を言っているのか理解できませんでした。「そんな格好では駄目だね、男が近づいて来ない。メイクも落としてありのままの姿で勝負しようとするのかい。十代でもあるまいし」老婆はあざけ笑いました。なんで見知らぬ他人にそんな事を言われるのと小百合は憤慨しましたが常識人の小百合は黙っていました。「私は汁が吸える。上手いものだよ」「はあ？」小百合はこの老婆しか話相手が居ないので老婆に付き合うしかありません。無視されるよりかマシです。「汁って何の事ですか」「かまぼこは魚から出来ているのを知っているかい」「知っています」「カマトトぶるんじゃないよ生娘でもあるまいし」なにやなにやでなんで怒られるのか判らない小百合です。「マグロかい」「汁？かまぼこ？マグロ？老婆に干されて汗が出ます。息

も詰まります。

「次はどうして、次はどうして」トイレにアナウンスが流れました。

「塩が二つでなんだ」猫がトイレの棚の上で言いました。そこにあったトイレト  
トペーパーはどうしたのと小百合は真っ先に思いました。「えっ」「人の話は聞く  
物だ」「皆何を言っているの私には判らない」「話している半分も理解できないの  
かい。常識人さん」「これはどう言う事教えて」「知りたかったら降りれば良いさ」猫  
はそう言うと言っていました。トイレのドアが開きました。中の女性達は我先  
先に全員降りました。小百合はほっと息をつきました。「答えはCO2さ」猫の声だ  
けが聞こえました。ここは何処かしら小百合は知りたい気持ちとトイレから出たく  
ない気持ちとが交差しました。「何時まで上に乗っているんだ」便器が蓋を開け小  
百合をトイレの中から押し出しました。「便器の電気は便利の一つ」トイレのドア  
が閉まりました。そしてトイレは消えてしまいました。捨てられた小百合が着いた  
所は海の見える砂浜でした。他の人は居ません。どこかで見たことがある景色で  
したが小百合には思い出せませんでした。海なんて何処も似たような物で小学校の遠  
足の海も高校で初めてナンパされた海も皆同じにしか覚えていません。海風が小百  
合の髪をぐちゃぐちゃにします。浜風が小百合の目に砂を入れます。自然なんて  
嫌い。だから田舎に帰りたくない。自然をコントロール出来る都会が良いわ、涼風  
がパジャマ姿の小百合に吹き付けます。磯風と浦風も吹きます。駆逐できない寒で  
震えます。そうだここは前に夫と来た場所だと思い出しました。「帰りたい」小百  
合はつぶやきました。「帰っておいで」秋雲が消え望月が現われ照月に映ったのは  
母でした。月の下の親潮が二手に別れ6頭立ての犬そりに乗った母の喜美が小百合  
に近づいてきました。喜美は王冠にマント姿でマントの下はフリースでした。犬ぞ  
りは小百合の前で止まり喜美が降りました。「女王陛下のオナニー」一匹の犬が言  
うと喜美はその犬を睨みました。「下ネタ禁止」犬は保健所に捕獲され連れ去られ「  
自己満足の癖に、とかく人の世は住みづらい」と言い残して消されました。他の犬  
達はそれを見てケサラサラと笑いました。「私が手塩にかけた娘よ、寒かろう、寂  
しかろう」喜美は小百合にマントを着せました。マントを脱いだ喜美は普通のおば  
さんでした。「あんたは初老」犬が言いました。「女を年齢で差別禁止」犬は保健所  
に連れ去られました。「私が帰りたいと言ったのはあの時に帰りたいと言う意味」「  
海から生まれて水の中に入れると消えてしまう物と同じ」「お母さん」「答えなさい  
」「何を？」「女王様偉い」「女王様賢い」「女王様法律」「女王様全知全能全自動洗濯機

、そして国家」犬達は叫びました。喜美はそれを聞いて満足そうに首を振りました。「国があれば父親などいらぬ。国破れて山河あり、会社潰れておさんどんあり、女は家事や育児をする為に生まれたのではない。女として自立して生きる為に生まれたのである。女性の社会進出こそ世界平和の基礎となる。女性に学問を与え社会進出させ税金を取り国が子供の面倒をみれば父親は必要無い。母性社会だけで育てれば暴力的な人間が育つはずが無い。だから戦争も起きない」喜美は声高に言いました。「そういう演説はマントがあった方が」小百合が言いました。「マントはトンマ、マトンは羊」喜美が言いますと羊の群れが現われました。「その他大勢名前無し大衆皆平等」喜美が言い、羊はメイメイと鳴き犬達は尻尾を振り銘々羊の毛を刈ります。「全ての差別を無くしましょう、全ての暴力を無くしましょう。原始女性は太陽であった」「よっ天照大神」「お上の税金泥棒」「権力の批判禁止」また犬が連れ去られました。「愛よりお金、お金は税金、税金が必要だから女は働かなければなりません。男に面倒を見てもらうより国に面倒を見て貰う方が安心に決まっています。その為女は自立して働くのです」喜美の言葉に犬達は自分の尻尾を追いかけ回り出しました。そして羊達は裸にされ泣いていました。これは何？小百合の頭は状況に付いていきません。小百合には喜美の言葉と犬達と羊達が何をやっているのか判りません。「1947年のフィアデルフィア宣伝だな」猫が裸の羊の側で言いました。「宣伝？」「ご免間違えた。宣言、つまり奴隷解放宣言、ソドミじゃ無い。私益として使うより労働力として金銭を払いそこから税金を取れば国家の利益が大きくなる。女性解放はその宣伝に乗った訳だ。時あたかも戦争終了時男が戦死して労働力が足りない時だ」「みんな何を言っているの夢なら覚めて」「起きれば覚めるさ、団塊の世代がみんな死亡すれば人類の夢は覚める」「何を言っているの私には判らない」「団塊の世代が登場し人類史上初めて時間を売り大多数の人間が食べられる様になった。時間は全ての者に平等なので人類皆平等意識が生まれた」「でも何かを取れば何かを捨てなければならないんだよ」これは何処からか現われた老婆が言いました。「11時11分」これも何処からか現われた目覚まし時計がいました。そして時計は「ここだけの話あんた時間は大丈夫」と小百合に耳打ちしました。「時間？時間って何の時間」小百合は聞き返しました。「はははあ」笑いながら時計は消えてしまいました。「女の尻ばかり見ていたら鼻血が出そうだよ」便器が現われて言いました。小百合はまた現われた下品な奴に嫌悪感をあらわにしました。「あらま、便器を汚い物を見る様な目で見るとべっぴんさんになれないぞ」「私はこれで充分よ」「ほお俺の目から見ても充分行けるぜ、

伊達に女の尻ばかり見ていない。他のも見てるけど」「変態！」小百合は叩きつける様に便器の蓋を閉めました。「俺が何時も女の事ばかり考えていると思っ  
ているのか」それでもめげずに便器は蓋を開けしゃべります。「そうに決まっ  
ているでしょう」「そうか、だから月1回鼻血が出るのか」便器は笑って  
言いました。小百合はこの不愉快な便器を蹴ってやりました。「痛い！本  
当に血が出たらどうするんだ。覚えてやがれ、覚えてなければメールし  
てやる。お前の母ちゃん出ベソ」便器は捨て台詞を残して消えました。  
「私は出ベソではありません。あなたのへその緒はきちんと桐の箱に入  
れて大切にしまっています」喜美が言いました。「桐は成長が早いから娘  
が産まれたら植えて花嫁道具を作るそうだ」喜美の王冠の上で猫が言  
いました。「父親が居れば花嫁道具も揃えられ結婚式も挙げられたのに  
女手一つで苦労をかけてすまなかったねえ、私も団塊の世代、世間の波  
を上手に泳ぎ切ったと思ったけど、何かを失った」「苦労なんて思っ  
てないわ」「嘘つき」小百合に猫が猫パンチを出しました。「嘘？」  
「人間が一番良い方法より二番目に良い方法を選ぶ不思議な動物だ。  
一番良い方法の危険を恐れて二番目を選ぶ、そして苦しみ嘆き嘘をつ  
く、後は何処で納得するかだ。たいていの人間は嘘をつき続けて生き  
る。生きると言うのは嘘をつく事」「何の話になったの」「港の話さ」  
「港？港って何？」「港から船が出る話さ」「何を言っているの」「航  
海の話さ、人間は何処かで納得しなければ社会生活出来ない。そし  
て後悔する」猫が言うと犬達がワンワン吠えました。「うるさい！犬  
が猫に敵うと思っているのか」猫は背を丸め毛を逆立ちさせ犬達を威  
嚇しました。犬達は尻尾を丸めて逃げ出しました。「人間の身体能力で  
捕まえられる動物は居ない。捕まえる事が出来るのは虫ぐらいしかい  
ない。人間は金が無いと生きてはいけない動物だ。一円も無ければ三  
日で自殺するか発狂する」猫は飛んできた蛾を捕まえ食べました。「  
まずい」猫は蛾を飲み込みました。「女が虫を食べて満足するならば  
人類は進化をしなかった。虫しか知らない時に塩鮭を持って来た男が  
現われたら女はどうするか」「それは塩鮭の方が美味しいからいた  
だくわ」「寄せ鍋を持って来た男には」「寄せ鍋の方が栄養バラン  
スも良いし美味しいしいただくわ」「フランス料理なら」「そっちの  
方が高そうだからそっちを選ぶ」「もらってタダで済むかい？パン  
ツを脱ぐかい？義理人情でパンツを脱ぐかい？」「母親が女手一つで  
苦労させた話だと思っけど」小百合が言うと喜美が「義理も積もれば  
大和撫子でいられない。三回食事をご馳走されれば散会で済まなくな  
る。女と産まれたからには男が寄って来ないのは致命傷、ご名答は食  
べるだけ食べて逃げる事、でもこの歳になると食事にも誘われない。  
乳房があるのが悲しい。女である事が悲



しい。」喜美が言うと「おやあなたも」老婆が言いました。「女は一分一秒でも長く生きなければならないから悲しい」喜美が言いうと犬が喜美の足にすがりつき腰をカクカクさせました。「女子高生の履いているパンツと私が履いているパンツは何が違う。同じパンツじゃないか」喜美は腰をカクカクさせている潤んだつぶらな目の犬を叩きました。「女の暴力反対、女は地球上の生物で一番凶暴だ」犬はそう叫んで逃げていきました。「女の全ての言動行動は自分の利益の為にあるBY猫」猫は逃げる犬の上でロデオの様に揺られながら言いました。「次は何の話になったの」小百合はやっと口を入れる事が出来ました。女はしゃべらなければなりません。沈黙する女に何の価値があるのでしょうか。しゃべらなければ取りあえず何が無くとも人の話を聞かなくてもしゃべらなければなりません。「悔しいよ、悔しいよ、今思い返しても本当に悔しいよ」老婆は泣き出しました。「どうしたのですか？何かあったのですか？」「聞いてくれるかい、ありがとうよ、実は私の人生は何も無かったんだよ」「はあ？」「それが今思い返しても悔しくて」老婆は泣きながら言いました。「私の勝ちだね、私は自由恋愛をして結婚をして子育てして離婚をして一通りの人生をこなしたよ、嫁と姑の戦いのした。子無しは3年で離縁の時代があったんだよ人格を否定された時代があったんだよ、女は社会進出させない子供を産めば良いだけだと学校にも行けない時代があったんだよ、それを私達団塊の世代は数に物を言わせて世論を変えてやった。団塊の世代こそパイオニアで勝利者で政治と経済を引っ張っている民主主義者」「なのに何を後悔しているの？」「しょうがないねえ答えは塩だよ」「塩？」「海から生まれて水に入れると消えるのは塩だよ、潮時なんだよ」喜美はポツリと言いました。「帰りたいねえあの時に」老婆もポツリと言いました。「塩だって入れ過ぎれば溶けないで残るわ」小百合は慰めようと取りあえず言いました。「問題の解決の答えだと思っていたのがある日突然問題その物になる」荒れ狂う犬にまたがった猫が言い通り過ぎて行きました。「まだいけるかしら」「いけますとも」「あなたこそまだまだお若い、何か秘訣でも」「秘訣なんて何もしていないのですよ」「あなただってお美しい、何か秘訣でも」「あらそんな嫌ですわ」喜美と老婆は否決も可決しない話を続けてやっぱり男は駄目で意見の一致をみました。

「小百合は男を何処で選ぶんだい」喜美が言うと裸の羊達がメイメイ鳴きながら三人の元に来ました。裸の羊は見分けがつきません。どれも皆同じに見えます。「これは羊、人間の男じゃない」「問題は問題と思わなければ問題ではない。問題と思うから問題になる」犬を飼いならした猫が言いました。「この歳になると男は私の

孤独を解消してくれるのなら誰でも良い。人に忘れられるより一時でも私の存在を意識して欲しい」老婆が言いました。「私は健康かしらこれから世話になったり世話したりするのなら」「結婚する気があるの？」「縁があればまだいけると思っているのだけど誰も誘ってくれないのが悲しい。小百合は結婚する気は無いのかい」「結婚！結婚？結婚ねえ」小百合はもじもじしました。小百合もまだ若い身です。再婚も考えた事もあります。今喜美に問われ小百合の身から結婚の木の芽が出て成長し大木になりました。「気になりだしたら木になる。寄らば大樹の陰」木に成って殻に包まれた猫が言いました。「結婚なんてこりごりよ」口ではそう言いましたが小百合には気になる人がいました。頭でっかちに成った小百合の下に斧を持った狐と狸が現われ小百合の木を切りました。「木が倒れるぞ」木になっていた猫が叫びました。「これからどうするんだい。みつ子の将来もある。このままじゃ倒れてしまうよ」喜美が言うと「団塊の世代が常識を変えてきたんじゃ無かったのかい」老婆が言いました。「人間として普遍的な物です。子育ては」喜美は言いました。「人間は不便を変える。結婚の制度は良く出来ている制度だ。特に再婚するにはよく出来ている。二番煎じで美人と結婚できるが前の夫の子の養育の義務も生む、男と女の狐と狸の化かしあい」猫が殻を破って言いました。「愛よ、愛で結婚するのよ」小百合は常識の殻で包みました。狐と狸はカラカラと笑い消えました。「無視」常識人の小百合は猫に付き合うのが嫌になってきました。「虫かよ」猫はお腹を叩いて蛾を吐き出しました。「我を張ると良い事無いぜ」「どっちが」小百合は意地を張りました。吐き出された蛾は小百合と猫の間を飛んで終いには老婆の頭に止まりました。「ここは亀の甲より年の考だよ、ここは子を持つ母親として考えてごらん、子供にとって新しい父親が必要かどうか」「何故？私は結婚するとは言っていないわ」小百合は言いました。「もしもの話」老婆が言いますが小百合には合点がいきません。老婆は我田引水を計るため羊達を並ばせました。「団塊の世代をどうするかだよ」「結婚と団塊の世代なんて関係ないでしょう。話があっちこっちに飛び過ぎる」「女の話はあっちこっちに飛んだり戻ったり、そして共感する所探る」猫の言葉に小百合は「話に付いていけない」と大声で叫びました。「それは叫喚、行間を読むんだ」「嫌！私は私、関係ない。皆消えて何処か行って」小百合は言い殻を益々固くしました。すると羊が一匹二匹三匹と消えていきました。「これから団塊の世代が消えていくんだよ、戦争が終わって子供が爆発的に生まれて団塊の世代と呼ばれた。この世代をどうするか戦後の大テーマとなった。中学を卒業した団塊の世代を集団

就職させ時間を売らせ賃金労働者にする為に農地から離して労働力を作り物を買わせた。そして消費経済を進めた。結婚適齢期とテレビ冷蔵庫洗濯機の家電産業隆起と一致するし十代後半になればマイカーブームと一致する。バブルの頃は子供が大きくなり家が欲しくなる年齢になり今介護が問題となる。年金も団塊の世代が登場したから成立したんだよ、それまで農業がセイフティネットだったんだよ、年金も失業保険も生活保護も無かったんだよ、地域自給自足経済でおじいさんは山に芝刈りにおばあさんは川に洗濯に行く世界だったんだよ」「ガスを使えば良いじゃない。洗濯機で洗えば良いじゃない」「現金が無いから自分で何でもしなければならなかったんだよ、昔の農業は個人の能力では無く田畑の能力で最後は天候次第でどうなるかわからなくなる。それでも何時倒産するか判らない会社よりマシだと思っていたんだよ」「語るねえ」猫が老婆に言いました。「騙していない。この団塊の世代が消えてしまって消費しなくなればどうなると思う」「知らないわ、私には関係ない」小百合の殻はまた固くなり手足をすっかり隠しました。「坂道を転がるだけだよ」老婆は小百合を押ししました。押された小百合はゴロゴロと転がって行きました。転がる小百合を坂の途中で喜美が止めました。「まだ大丈夫、迎えに来たよ」喜美は蛇の目の傘をさして小百合を見ました。「結婚の事？田舎に帰る事？」小百合は喜美を見ると子供の頃を思い出しました。雨が突然降った日に小学校の友達は親が迎えにきて来れたのに小百合にはお迎えが来ませんでした。小百合は雨の中一人走って帰りました。母親が働いているから仕方ないと諦め、母が帰ると友達の傘と一緒に帰ったと嘘をつき子供心にも母親を安心させようとした事です。私が我慢すればそれで良い。「お前はみつ子にも同じ想いをさせたいかい」喜美は尋ねました。小百合はそれは嫌だと内心思いました。「お尋ね者はどうだい、お前はぴちぴちかい？グズグズかい？ラブラブかい？かたくなかい？そろそろ殻を破ってもいい頃だよ」喜美は蛇の目の傘で小百合の殻を突くと殻は破裂して消えました。「結婚こそ人類が発明した最高システムです。金とセックスの融合、唯我独尊唯一無二、個人の欲望の調和」「愛よ愛で結婚するのよ」「昔は写真だけで結婚したよ、お見合いは何時愛が芽生えるんだい」老婆は聞きました。「愛は生まれたり消えたりするのかい、それとも最初から無く義理人情と諦めと嘘で固めた物かい」と畳み掛けました。「そんな事を言ったら畳で死ねないわよ」小百合は言い返しました。「昔はお見合いの時に畳にのの字を書いてウブな振りした物だよ懐かしい」「ウブって何？ラブの間違い？」「あれが愛だの恋だのの昔がありました。団塊の世代が登場したから男も女も選ばれなければならない時代になったんだよ、女に学問をさせ

社会進出させる事は毎日優秀な男に出会う事を意味するんだよ、国民の就業人口の6割以上が農業の時代で男性との出会いが村祭りか農繁期しか無かったら縁談話で結婚を考えても比較が少なく農業で実力を見るには農地の広さを見ればわかったけど今国民の就業人口の6割が賃金労働者の時代、物やサービスを作って売れば良いけどこの十年間に二万の会社が解散したり倒産している。商店街も無くなっている。働く場所が少なくなっている。されど自営業をするには危険が大きい」老婆の言葉に小百合は自営業をするには危険が大きいだけ理解できました。「今正社員を捕まえなければこれから益々酷くなる。愛は無くとも正社員、愛とはセックスの代名詞」喜美が言いました。「セックスなんて納得する理由があれば出来る物、後は目をつぶって速く終われば良いと思っていれば済む」老婆が言いました。「私が結婚したい相手は愛する人」小百合は言いました。「その為には選ばれなければならない。男も女も選ばれる時代になった。もはや誰でも結婚は出来ない。自分が問題の答えだと思っていたのが突然問題その物になるから人間社会は不思議だ」猫はヒゲの手入れをしながら言いました。

突然に雨が降り始めました。喜美も老婆も二人で傘に入り去りました。すると何処からか「嫁入り～嫁入り～狐の嫁入り～」の声が聞こえてきました。小百合が声のする方を見入ると狐の花嫁行列がやって来ました。「コン、コン、嫁入り～狐の嫁入り～」提灯を持った紋付袴の狐を先頭に籠を担いだ狐達を中心に十数匹の行列です。先頭の狐が小百合の前に差し掛かると狐が「コン、コン、コンドームは何時着ける」と小百合に聞きました。「えっ」急に聞かれ小百合はうろたえました。「コン、コン、コンドームは何時着ける」と再び聞きました。「何時ってこれはまたなぞなぞ？あなたは解決なに？」「クイズみんなに聞きました」先頭の紋付袴の狐は背広姿の司会者に早替わりし小百合は解答者席に座らせられました。「ラブホテル街のカップルみんなに聞きました。コンドームは何時着ける。一番解答が多かった物はどれでしょう。一、服を脱いで裸になった時」「あるある」狐達が言いました。「それは早すぎるわ、でも服を脱ぐ前にもう着けている人がいると雑誌で読んだ事があるわ、やる気満々ならあり得るかも」「二、キスをしてから」「勃起するから着けられるのよ、勃起したのはキスをしたからそれとも裸を見たからキスが先？裸が先？」「三、前戯の後」「前戯と言うからにはこれよ、でも前戯を中断してゴムを取り出してそれから被せたら少ししらけるわ相手がやる気満々ならどうでしょう」「四、射精前」「それは挿入後でしょう。カスバー洗液にも精子が含まれる場合があるって言うし、ゴムより生の方が良いし相手がやる気満々ならどうでしょう

「五、着けない」「相手がやる気満々ならそうなるかもみんなどうしているの」常識人の小百合は頭を抱えました。頭をかかえた小百合を狐達が抱え上げ花嫁衣裳を着せ籠に乗せました。そして花嫁行列は進み出しました。花嫁行列はトイレの中に消えていきます。「間もなくドアが閉まります。お急ぎの方はお早めにお乗り下さい」のアナウンスが流れました。「おが多すぎる」と行列の最後の狐の尾が消えるとドアが閉まりました。

トイレの中に入ると狐達は消え花嫁姿の小百合だけになりました。「また俺に穴を見せに来たのかい」トイレが言いました。小百合はトイレを蹴飛ばしました。「血が出るぞ、法律に訴えてやる。民法がいいか刑法がいいか」「あんただってセクハラでしょう。訴えてやる」「それは深刻な申告罪、なにをカリカリしている。あの日かい」「セクハラ！」「あの日に帰りたいかい」「みんな何故私を怒らせ様とするの、私は悪くない」「みんながみんな正しいと思っているからだ。みんながみんな正しいと思えば残るのは孤独だけだ。人間どこかで納得しなければならない」「次はつかの間、次はつかの間」と車内アナウンスが流れました。「ほら出なよ、待っているぜ」「何が待っているの」「この世で待っているのは運命しかない」棚の上で猫が言いました。「運命？」「この世の7不思議の中の1つ運命は決まっているかの如し、後の六つを知っているかい？異性への愛は突然消える。金は直ぐ無くなる。洗濯すると靴下の片方が無くなる」「そんな事より棚のトイレトペーパーを返して」「水に流してくれない？」「無ければ困るのよ」「心配症はどれだけ使えば気が済むのだろう。外を見てごらん」「気が済まないから言っているのよ、この畜生」小百合はトイレの窓から顔を出して外を見ました。走っているトイレを追い駆けている喜美の姿が見えました。「犬は畜生、猫はなんでしょう」小百合の背に猫が言いました。走っている喜美は息を切らし立ち止まりました。「止めて！乗せて上げて」小百合は叫びました。「小判さ、意味は無い」猫は消えていきました。

トイレが止まりました。小百合は喜美を助けようとドアを開け出しました。ドアから出た小百合にスポットライトが当たりました。「新郎新婦の入場です。盛大な拍手でお迎え下さい」とアナウンスが流れ拍手の嵐が起きました。そして結婚行進曲が聞こえてきました。立ち尽くす小百合の手を新郎が取り二人は前に進みました。小百合は新郎の顔を見ようとしましたがスポットライトがまぶしくよく見えませんでした。前の夫の背格好でしたが夫の顔が思い出せません。「夫はどんな人だったかしら？」5年前に結婚した相手なのに記憶が薄れているのを知った小百合でした。スポットライトが二人を照らすのを止め真っ赤な太陽になりました。暗闇が消され現われたのは焼けた砂浜とイルカに乗った少年、高層ビル群、ビルの下ではマッチ売り少女が道行く人にマッチを売っています。大勢の一般人は足早に通り過ぎ誰もマッチ売りの少女を相手にしません。白雪姫は自らりんごを食べては眠りにつき人々に踏みつけられ起きてはまたりんごを食べます。シンデレラはガラスの靴をばら撒きますが踏み付けられて砕けてしまいました。七人の小人が掃除しようとしませんが一般人に「迷惑なんだよ」と吐き捨てられました。赤頭巾ちゃんは狼を待っていましたが狼は剥製になって飾られ話が進まずイライラしています。かぐや姫はネットで難しい問題を作るのに夢中で浦島太郎の釣竿で着物がめくられているのに気付きません。そんな様子を亀に乗った人魚姫が見ていました。一般人の雑踏の中を白馬に乗った王子が人の迷惑も考えず押しのけてやって来ました。ごちゃごちゃの世界だわと小百合が思うと新郎の姿は消えていました。花嫁姿なのに新郎がいないと言う事はあの王子様が私の相手なんだと小百合は思いました。王子様なら問題は無しこれで私も幸せになると思っていると白雪姫が飛び出し王子様の目の前でりんごを食べ倒れました。それを見たシンデレラは負けじと王子様の前にガラスの靴を置きました。馬を止めた王子は二人を見比べました。あの二人を選ばないで私を選んで、そう小百合が願うと王子の馬は歩き出しました。小百合は目をつぶり王子が私のもとに来る様に願いました。近づいてくる気配がします。胸がどきどきします。私を選んでくれた。小百合は目を開けました。目の前に立っていたのは猫でした。猫は長靴をはいて手に杓子を持っていました。「選ばれたかい？」「猫も杓子もと言いたいのでしょうか」「幸せな結婚と誰もが杓子定規に言う」「そっちかい」「好きでもない男と好きでもない女が結婚して幸せになれるのでしょうか？」猫の問いに「好きでもないから結婚と言う法的根拠が必要になる」亀の甲に乗った老婆が言

いました。「結婚した後私達はどうなるの？」白雪姫とシンデレラが小百合に詰め寄りました。白馬の王子様はチラッと小百合達を見て通り過ぎました。「お黙り！生物は相手に選ばれる事に最大の価値がある。選ばれなければ意味が無い。女が子供を欲しいと思わなければ人類は滅亡してしまうんだよ、男と女が一つ屋根の下で暮らせば不思議と子供が出来る」七人の小人に担がれた喜美が言いました。「愛は無くとも子は出来る。子は夫婦のかすがい」まだ通り過ぎない老婆が言いました。「かすがいの甘納豆で納得、甘茶でカツポレ、あまちゃんてカップル」猫がふざけます。「かすがいって何？」「かすがいは二つの材木をつなぎ止めるコの字型の釘」ネットで調べたかぐや姫が言いました。「出て来るねえ、これだけ誰もがしゃべれば誰が何を言っているのか判らない。女が三人集まれば性格が変わり猛獣より手強いと良く言った物だ」猫はふさぎます。「私達が何の為に苦労していると思っているの継母にいじめられたり血のつながっていない二人の姉にああしろこうしろと小突き回されながら働いているのよ」シンデレラが言いました。「あんたは家事手伝いでしょ。わたしは命を狙われているのよ、毒りんごを食べなちゃならないのよ」白雪姫が言います。「家事手伝いはニートじゃ無いわ、昔は国勢調査に書けたもの、白雪姫はタダの馬鹿、三回も同じ手に引っかかって」「なによこの出しゃばり、何時も自分が自分がと言うからいじめられるのよ、性格直せば」「何よあんたこそ七人の男と一つ屋根の下で暮らして何も無かったと言い張るつもり」「俺なら絶対にパンツは見るね、俺の亀見る？俺の亀は大きいぜ」釣竿で白雪姫のスカートをめくっていた浦島太郎が言いました。怒った白雪姫は浦島太郎の玉手箱を奪うと蓋を開け浦島太郎に投げつけました。煙を浴びた浦島太郎は一挙に老人になりました。「生物的に五十歳以上の男に生きている理由は無い」シンデレラは言葉を投げつけました。浦島太郎は「過去の男になった」と泣きながら去りました。去る太郎に猫が後ろ足で砂をかけました。「結婚してしまえば過去の男なんて関係ないわ、婚姻届を出せばこっちの物よ、女は過去の男なんていちいち覚えてられない。すぐ忘れなきゃ花の命は短いのよ」「時計の針は止まってくれない。上書き上書き、保存してられない」「その通り私達気が合うわ、やはりジャンルが同じだからかしら」「本当！お気に入りでフォローしあいましょう」白雪姫とシンデレラは仲良くなりました。「女同士の間も不思議の一つ、あんなに仲が悪かったのが仲良くなる。不思議と思わないかい」猫が言うと「永遠なのは親子関係だけです。切っても切れない血のつながり母親が自分の子供を守らなくて誰が守るのですか、ママのベイビーパパのメイビーです。法律上の父親さえいれば良いのです。片身の狭い思いをし

なくて済みます」喜美が言いました。「猫の額は狭いよ狭いながらも楽しい我が家、出物腫れ物所構わずだし」「それは意味が少し変」小百合はやっと口を挟みました。主人公なのにけもの偏を手偏に変えるのが精一杯です。「出物腫れ物は所構わずは子供が何時出来るかわからないと言う意味をあります」かぐや姫が言いました。「甘いねえ甘茶でカツポレ」猫は長靴を脱ぐとかぐや姫に渡して消えました。「下駄の代わりに長靴を預けたのでしょうか？私は月に帰らなければならないのに」かぐや姫が言うと「私たちは新しい王子様を探さなくては」シンデレラと白雪姫はやって来た紙のバレリーナと錫の兵隊の車に飛び乗り去って行きました。「そう結婚式の最中じゃないの、私の相手は誰だっけ、何処にいるの」小百合は辺りを見回しました。「マッチはいかがですか、キャンドルサービスに使うマッチはいかがですか」とマッチ売りの少女が近づいて来ました。「マッチを買って下さい。一つも売れないのです。政治家と禁煙団体が一緒になって職業差別をするのです。彼らの何が正しいのでしょうか。私は生活の為に働いているだけなのに」マッチ売りの少女は言いました。常識人の小百合は多数決で決められたとは言えませんでした。「あすこに居たぞ、火があるからタバコが吸いたくなるんだ。火が無ければタバコは我慢出来る」「学校はどうした。児童労働禁止」現われた禁煙団体はマッチ売りの少女を取り囲み連れ去りました。それはあっと言う間の出来事で小百合にはどうする事も出来ませんでした。常識人の小百合は多数決で決められた事を守るしかありません。マッチ売りの少女が去った後にマッチ箱が落ちていました。小百合は持ち主の少女の姿を探しましたが見当たりませんでした。小百合はマッチ箱を拾うと一本火をつけました。そのマッチの炎の中に小百合が映っていました。炎の中の小百合は新婚当時のアパートの一室で台所仕事をしていました。小百合の口元は自然と笑みを浮かべて幸せそうです。ルンルン気分が伝わってきます。マッチの炎は直ぐに消えてしまいました。そんな事もあった気がすると小百合は思いました。小百合は再びマッチを擦りました。次のマッチの炎の中にはお腹の大きな小百合がいました。みつ子を妊娠した時だわ、小百合は自分の大きくなったお腹をさすりなにやら話し掛けています。そこでマッチの火は消えてしまいました。また小百合はマッチをつけました。するとそこには銀行の通帳を見ているお腹の大きい小百合がいました。炎の中の小百合は通帳を見てため息をついています。そして通帳を置くと財布の中を卓袱台の上に広げました。千円札4枚と小銭が少々でした。小百合は財布の中のクレジットカードを取り出しました。「嫌！嫌！こんなマッチ嫌！」小百合は火のついたマッチを投げ捨てました。でもマッチの火は地面に燃え移りやがて炎は大き



くなりました。炎の中に映し出されたのは男と喧嘩をしている小百合でした。小百合は走りだしました。炎は大きなスクリーンになり小百合を追いかけてきました。炎のスクリーンには酒に溺れている男がいて側で泣いているお腹の大きい小百合が映っていました。小百合は走りながらなんで結婚したんだろうと思った時に「コン、コン、コンドームは何時着けるの答えは」と狐が小百合と一緒に走りながら聞きました。小百合は狐を振り切って走ると川に出て川沿いを走り続けました。それでも炎は追い駆けてきます。その川の川上からドンブラコドンブラコと老婆が流れてきました。「愛の結晶」と老婆が言い川に身を浮かばせながら流れていきました。「身を捨てて浮かぶ瀬もある。つなぎ止めなかったのかい？かすがいの様に子供はどちらが望んだの？」杓を持った猫が現われて言いました。「確信犯かい」猫が聞きますと「審判」と狐が現われて言い消えました。「女は悪くない」と小百合は言いました。「杓子定規だねえ」猫は杓で川の水を汲むと炎にかけ火を消しました。炎が消え小百合は立ち止まりはあはあと肩で息をしました。「シーシーハー、シーシーハーさあ一緒にシーシーハー」猫が言うと小百合は合わせてシーシーハーと息をしました。「男と女結婚して得をするのはどちら」猫が聞きました。「男よ、女は苦しんでいるのよ」「何を」「何をっていろいろよ」「十人十色とは人は人によって見ている世界が違う事だ。動物のしている事は三つだけ食べる事と子孫を残す事と寝る事、人間はそれを複雑にしているだけだ」「猫に説教されたくない」「しゃくにさわる」猫が杓を差し出しました。小百合は猫から杓を奪うと振り回し猫を殴ろうとしました。でも身軽な猫は身を翻しても言葉を翻したりしません。「人間がイネ科の食物を見つけた時から食糧確保に従事しなくて良い職業が出現し金銭が使われ出した。狩猟民族なら獲物を見つける為に移動するので字を発明する暇も無く文明が発達するほど大量の食糧確保は難しい。天候が荒れる日が続けば飢え死が待っている。世界三大文明の発祥地は同じ気候帯でそこに馬が」「聞きたくない」「おやおや馬の耳に念仏かい」「何が言いたいの、私が悪いとでも言いたいの、私を責めるつもり、結婚したのがいけないの子供を産んだからいけないの離婚したからいけないの小難しい事ばかり並べて」「人間は感情の動物、感情は揺れ動き悩み苦しむ」「みんな消えて私の事はほっといて」「人は一人では生きていけない。摩擦を受けながら生きていかなければならない」猫は消えながら言いました。小百合は暗闇にポツンと残されました。辺りは何も見えません。何も聞こえませんが。匂いもありません。小百合の心臓の鼓動だけが感じられます。こんな時が前にもあった気がします。それは子供の時に母親の帰りを一人で待っていた時と同じでした。お化けが出な

いかと怯え母が帰ってくるのを待ちわび耳に神経を集中させても聞こえるのは心臓の鼓動だけでした。その心臓の音が二つになりました。すると暗闇から喜美が現われました。「子孫さえ残せば男への愛なんてどうでも良いのです。後は金です。子供には金がかかる。昔の農業をしていた時代なら義務教育は小学校6年間で地域自給自足経済に対応出来たが現代は組織会社が人材を選ぶ時代、選ぶなら人間の言葉が判る人間を選びたい」「話がわからないのよ」「人の話が判る人間は想像以上に少ない」「みんな言葉を話している」「どこぞのマスコミが流した言葉を聞きかじって知った振りして言っているだけ」「それで良いじゃない。関係ないもん」「そう関係ない。大事件のニュースなら人々は関心を持つけど個人の悩みに関心は無い。そして人は孤独になる。みんなが正しい正しいと思えば思うほど孤独になる。孤独になれば金が助かる道になる。人が個人的に人にお金を払う理由は二つしかない。役に立つか良い人かだよ、自営業で儲からないのは役立たずの嫌われ者と言われているのと同じだよ。夫の自営業が失敗したのも同じ理由、お前は悪くない。悪いのは餌を運べない男、男のスペアでも持っていれば良かったのに」「妊娠中」「お前の器量ならいだらう。世間の常識に従ったのかい。原始の時代から男は狩や戦争で死んだり駄目になったりするの当たり前、その男の代わりを何時でも用意しておくのが女の務め」「非常識過ぎる。女性抗議団体に言いつけてやる」「マスコミで言えばね、マスコミが取り合わなければこの世に無いも等しい。近代はマスコミが世間で常識で取り合わなければ痴話話、個人の嗜好、よく考えてごらん」「何処に向かっているの」「実地にやるんだよ、再婚を志向する事を男を騙しても子供を育てる事を、それとも何か固い主義主張があるのかい」「別に」小百合は小さく答えました。「主義主張は無くても初潮はある」時計が11時25分をさして現われました。「時間は大丈夫かい」「何の時間」「女の時間」「さっきから時間時間って女の時間で何よ」小百合が聞いても時計は答えずに消えてしまいました。「普通の男と再婚するなら公務員第一、第二は金を持っている男、近場の取り得の無い男なら再婚する価値なし、国に面倒を見てもらった方がマシ、後は機械の様に働くか」「残酷」「女が残酷であればあるほど男は選ばれようと進化し人類は発展する。金の無い男に美人の妻は辛い。男が死のうと生きようと女には関係ない。男の努力が足りないだけ、だから努めるは女の又力と書く、美人に虫を食べさす男は去るだけ、次の男が現われれば問題ない。お前が離婚したのもまだ次の相手が見つかると思っていたからだろう。次の相手との問題は子供を作るか作らないかになる」喜美が言

いました。「止めて頭が混乱する」小百合が言うと「コン、コン、コンドームは何時着けるの答えは」また現われた狐が聞きました。小百合が答えないでいると「はい時間です。もう遅いです。おめでたです。女の赤ちゃんです」と狐が言うと小百合の腕の中には赤ちゃんがいました。「みつ子、私のみつ子」小百合が呼びかけると赤ちゃんのみつ子が目を開けました。小百合は微笑み返しました。すると「パパは？」赤ちゃんのみつ子が言いました。小百合は夫を探そうとしましたが夫の顔が思い出せません。「何故私からパパを奪ったの」みつ子が言います。「えっ」と小百合は驚いて言葉も出ませんでした。「私には父親が必要無いって言うの、それはあなたが決める事なの」「みつ子あなた何を言い出すの」小百合が言うと駅が現われました。駅の名は始まり始まりでした。「トイレが現われると思ったかい。駅だからプラッと現われたのさ、ホームはそこさ」猫がそう言って指を指しました。

大きくなった三歳のみつ子が一人卓袱台に人形とままごとセットを広げていました。「ママお帰り、お腹すいた」みつ子は人形の声を出しました。「ごめんなさい。今日は残業で遅くなって、パートの人が突然休んだから大変だったの、今日はどの冷凍食品にしようかしら、それともコンビニ弁当が良い」みつ子は人形に聞きました。「コンビニ弁当」「毎日コンビニ弁当でも良い」「うん、良いよ」「包丁なんていない。まな板もいない」みつ子はおもちゃの包丁とまな板を投げ捨てました。「私は時間を売ってお金をもらっているのよ、食事を作る時間があれば働いた方が徳なのよ、お弁当にジュースの何が悪いの？レンジでチンする為に働いているのよ、昔みたいに一家の食事を作るために何時間も家事労働する時代じゃないのよ、時間があれば働きなさい。金で解決すれば良いのよ、あなたもそう思うでしょう。私のベイビーちゃん」「ママの言う通りにするわ、ママが怒ると私悲しくなるの、ママ無しでは生きていけない幼い私に何を逆らえるの」「あなたも大きくなったら料理なんかしちや駄目、おばあちゃんもそうだったし、ママも料理が出来ないからからあなたも料理しないで勉強を一杯して社会進出してね」「勉強？まだ早い。もっと遊びたい」「駄目です。コンビニ弁当では無くフランス料理を食べさせてくれる男を捕まえには今から勉強しなくては駄目、女手一つで育ててあげるからママの想いのままにきなさい。ママの選んだ服を着てママの選んだ学校に行ってママの選んだ職業に付いてママの選んだ人生を送るのよ、よしよし良い子、あなたは私の全てだから」みつ子は人形抱き上げました。「一緒にコンビニ弁当とジュース買いに行きましょう」「ママお願いがあるの」「何？」「この世に味噌汁と言う物があるらしいの、それと漬物のご飯が一番合うおいしい食べ物なんだってそれは本当なの」「うそよ、フランス料理のご飯が一番あうの、だから勉強きなさい」みつ子は言いました。駅のホームから一人芝居を見ていた小百合はみつ子のホームに向かって走り出しました。そしてホームインすると小百合はみつ子を抱きしめました。「ごめんね、ごめんね、一人でこんなに長いせりふを言わせて本当にごめんね、ホームは五面ね、何処で切ったら良いか判らなかつたの」「ママお帰り、ねえ母の味は冷凍食品の味なの」みつ子が言いました。「今日は腕によりをかけてご飯を作るわ」「あっそれはいいです。ママの料理よりインスタントや冷凍食品の方が美味しいから」みつ子にのしを付けて返されました。小百合は料理が得意ではなかつたのです。抛り所を失った小百合は愕然としました。「漬物って何？」「漬物は駄目、漬物を食べ

る為にはコールドチェーンと言う魔法使いをやっつけなければならないの、でもこのコールドチェーンが無くなればママの仕事が無くなるのだから食べては駄目」「漬物は悪い奴？」「そう食品業界の敵女の敵、貧乏臭くて塩分が強くて作る個人の差が出る女の敵」「そうなの？全国漬物安全普及委員会から苦情は出ない？」「サラダを作りましょう。今は全日本サラダ連合会と日本ドレッシングマヨネーズ協賛協同協会が強いから良いのよ、おしゃれで簡単レタスを千切るだけ、さあ料理をしましょう。チンして千切って出来上がり後は電気代を払うだけ」小百合が言うと「性格が変わった。猫を被っていただけか？」見ていた猫が言いました。「まだいたの？ここは結界が張ってあって妖怪が入れないはずなのに」「家の中に入れば用は無いかい」「ここは私の家よ、化け猫は出て行って」「家？本当にそう思うかい」猫が言うと狼が現われ大きく息を吸い込みました。「狼だ。狼が来たぞ」猫は言いました。狼は一息で小百合達のわらの家は吹き飛ばされました。「母子家庭にやさしい公営団地だと思っていたのに」小百合とみつ子は木の家へ逃げ込みました。「狼さんの耳はどうして大きいの」とみつ子が狼に聞きました。「それは泣き叫ぶ弱者の悲鳴を聞くため」と言うと狼は木の家を息で吹き飛ばしました。小百合とみつ子はレンガの家へ逃げ込みました。「狼さんの目はどうして大きいの」またみつ子が聞きました。「契約書や書類を良く見るため」狼はレンガの家を一撃で破壊しました。小百合とみつ子は抱き合い怯えます。「狼さんの口はどうして大きいの」「それは法の下での平等を実行するため、さあ税金と公的年金と保険を払え！払えなければ相談しろ、俺様を無視するな」狼は真っ赤な赤札の舌を出して言いました「公共料金だけで精一杯なのにその上税金なんて、それさえなければ生活が楽になるのに、少ない収入があるのが悔しい。肩身の狭い思いをしなければ生活保護の方が手取が多いのに」小百合は言いました。「弱者を手玉に取るのが俺の仕事、さあ困ったと言え、泣き叫べ依存しろ自主独立、自己救済するな、弱者であれば予算が増える。消費税も30%40%まで上げられる。人権を守る為に税金を払え、生かさず殺さずにしてやるから泣き叫べ」狼は大きな口を開け高笑いしました。「そんなシippoを出す事を言って後悔しないの、死んでやる。公的年金と保険が生活を圧迫していると遺書に書いて自殺してやる。お前の名前を書き白日の下にさらしてやる」小百合が言うと狼は白目をむいて驚きました。「私が何をしたとおっしゃるのですか、私は法に従っているだけなのです。国民の義務を守っていただきたいだけです」狼はシドロモドロに答えました。「名前を言え、今の言動をネットに流してやる」「そんな事をされたら公務員を悪者扱いする連中の網にかかってします。

弱者でいて欲しいだけです。弱い者がいないと予算が降りないのです。政治家と公務員は困ったと言ってくれなければ予算が降りないのです。私はタダの公務員です。法律に従っていればそれで良いだけなのです。弱者が困った。困ったと言ってくれるから仕事をしている振りが出来るのです」狼は背中チャックを降ろしました。狼だと思っていました。着ぐるみを脱いだらひ弱な狐が現れました。「公務員を辞めたら弱者に転落してしまいます」狐は土下座をして許しを請いました。「苦しみを味わえばいい」小百合が言うと「今のを動画に撮った。編集加工してネットに流してやる。ネット住民に知られたら住所を割り出され宅配ピザが配達されるぞ」「今のは恐喝！これも動画に撮ったわ、あんたの家には宅配寿司が送られる」小百合とひ弱な狐はにらみ合いました。「何時までやってるの？」みつ子が猫を抱えて言いました。「そんな動画を見て騒ぐのは仕事が無いマスコミと弁護士ぐらいだろう。今は弁護士も食えない時代、出来ると言う事と人が金を払う事とは別の事なり資格があっても事は上手く行かない」猫があくびをして言いました。「大人は何をイライラカリカリガミガミ怒りっぽいの？」みつ子が聞きました。「虫の居所が悪い」「虫が悪いの」「人間の最大暴力は無視、無視はされたくない。されどコントロールされたくも無い。自由奔放ありのままに生きれば蟻地獄に落ちる」猫は身体能力を活かしてみつ子から離れると狐を突き飛ばしました。狐は地面に出来た蟻地獄の中に落ちました。落とされた狐はい上がるろうともがきませんが砂の斜面を登れません。それを蟻の行列が見て見ぬ振りをして通りすぎます。「ほら蟻達は誰かが助けると思って見ているよ、自分は無視をされたくはないと思っているくせに他人を無視する。虫のいい話」猫は言いました。狐はズルズルと斜面を滑り落ちて行きます。すると蟻地獄の底から喜美が現われ狐を捕まえました。「このうすらばかかげろう。何時まで地獄の底を見ていれば気が済む」喜美は狐を襟まきにすると小百合に言いました。「砂を噛むような味気ない毎日なら味付けに工夫すればいい。冷凍食品も一手間かければホテルの宴会料理にも見える。幸福の絶頂には悪魔が住んでいるけど地獄の底には天使がいる。はい上がるんだよ」喜美は蟻地獄を上ってきました。「おばあちゃん、味噌汁って美味しいの？漬物って美味しいの？」みつ子が喜美に駆け寄り聞きました。「小百合、みつ子に食べさせておやり」「節約中、コンビニの弁当のおかずで二回食べているのが現実」「そんなに現実には苦しいのかい」喜美が聞くと「苦しい時は公務員にご相談を、話を聞くだけですけど、質問されなければ答えられないシステムになっております」喜美の首の狐が言いました。「首に出来ない」喜美は狐を振り回しました。「いくら振り回しても大

丈夫です。公務員は問題を解決するより問題を長引かせる方が仕事があり続けるのですから」「時間の無駄」喜美は狐を遠心力を使って投げました。「求心力が必要だね」亀に乗った老婆がお茶と茶請けの漬物を持って現われました。「亀さんだ」みつ子が亀に近づきます。「この亀は浦島太郎の亀だったんだよ、私も玉手箱の煙を浴びたこんな年になったの、昔は番茶も出花だったのに」「番茶って何？」「摘み残しのお茶、私は売れ残りで王手がかかったのが玉に傷、結婚生活で出鼻をくじかれ、貧乏くじを引いて引き際も悪く離婚できなかった。今の人は良いねえ、くつついたり分かれたり直ぐ出来る。私に求心力は無いかもしれない。お茶でも飲むかい」老婆は急須を手に取りお茶を入れようとして手を滑らせ急須を落としました。「万事休す、貧すれば鈍する。考えるのも嫌になる。時間が過ぎるのを耐えるだけになる。そして気付いた時には月日が流れている。歳月は人を待たず、誰でも年を取る。問題の答えが問題そのものになる。時は待ってくれない」「11時35分」時計が現われそう告げると消えました。「再婚する気があるのだろうか」喜美が小百合に聞きました。「再々再三再四、妻子があっても採算が取れる」猫が茶化します。「茶化さないで」「お茶請けに漬物はどうだい。よく漬かっているよ」

小百合は漬物樽に重石を乗せられ漬かっていました。「私が重い？」樽の蓋の上のみつ子が聞きました。これは小百合の人生でもありみつ子の人生でもあります。インスタントで出来るものではありません。青菜に塩と言う訳にも行きません。「請ける？請けなければ駄目？」小百合の心はへなへなになります。「請けるにしろ断るにも答えを出さなければならない。何時までどっぷり漬かっている気だい」「忘れるまで」小百合は言いますが「残るのは貧困のみ」「蟻地獄から抜け出す方法の一つが再婚」「法的に則っていれば乗っ取っても構いません」「漬物美味しい、ママ、母の味よ」「ママ父でも良いの」「わかんない。三歳だもの」「再婚するなら小さいうち」「入れて揉むだけ即席浅漬け」「嫌なら即、籍を抜けば」次から次へと皆が勝つてな事を言い小百合の頭の中はぐるぐる回ります。遠心力と求心力とのせめぎ合いで錐もみ状態で落ちていきます。「愛は何処？」小百合は愛を着地地点にしたかったのです。「最後は信念」老婆が言いました。小百合はみつ子を見ました。そして「みつ子に寂しい想いはさせたくない。生贄の男を捜すわ」と言いました。「それが再婚する理由かい」猫がお茶をふうふうしながら言いました。「夫婦なんて所詮他人緒戦だけセックスする理由だけ、子供の為なら何でも出来るわ、耐えて見せませぬ演技もします。いざとなったら頭が痛い調子が悪いと早寝すれば良いのよ」「そうと決まればドラフトよ、男を選ぶドラフト会議が始まるよ」喜美が言いました。





ドラフト会議はどこぞのホテルで始まりました。何処の馬の骨かわからない女性達が会場に詰めかけ爪先立ちで立っている人を爪弾きにし、飛ばした人に詰め寄る程の混雑さでした。その混在の中に小百合はいました。喜美も老婆もいました。ざわめく会場は照明が落とされると静かになり司会者の猫が登場しました。猫は闇の中を目を光らせました。「これより結婚相手選択会議を始めます。最初の男性はこちら白馬に乗った王子様」猫が言うと舞台中央にスポットライトが当たり白馬に乗った王子が照らし出されました。すると女性達が王子を見て目を輝かせました。「何処の馬の骨ではありません。れっきとした王子様です。社会的地位収入申し分無し、顔も身長も良いです。全女性の憧れの的、誰が射止めるのか」「王子様こっちを向いて」女性から声がかかりました。「競争が激しくなるのは必至です」猫が言いました。小百合は王子を見て一目で好きになりました。頭に描いたその人だったからです。「問題なし小百合決めな、もう二十若かったら私が行くのに」喜美が言います。「早くパンツを脱いでモノにしなさい。さもないと私が汁を吸っちゃうよ」老婆は入れ歯を外しました。「この人こそ運命の人だわ」逆指名されたい小百合は立ち上がろうとしました。その小百合をシンデレラが突き飛ばし王子に駆け寄りしました。「おっとさすがシンデレラ積極的です」猫が司会者から実況アナウンサーに代わりました。シンデレラが飛び出すと白雪姫も負けと飛び出します。「さあ竜虎激突です。二人とも美人の上に男を騙すテクニックは一流です。王子はどうする」二人を見て小百合は立ち尽くしました。その小百合を見てシンデレラは「バツ一、子持ち、三十半ばで白馬に乗った王子様は無いでしょ」と馬鹿にしたように言いました。「おっとシンデレラ何処まで性格が悪いのか、小百合サイドはどうする」猫ががなり立てます。「小百合どうするんだい」喜美が言います。小百合はタオルを投げました。「おお、小百合サイドギブアップです」「私なんか相手にされない」小百合は言いました。その後に女性達が王子の元へ殺到し王子を連れ去って行きました。「良い遺伝子を獲得する肉食系とはこのことなり」猫が叫びます。舞台には馬が残されました。「俺は草食」馬は言いました。「続いてはこの白馬です。この馬体の美しさ、無駄な筋肉はありません。性格は集団行動を好み馬車馬の如く働きます」猫が説明します。「男は仕事をしてなんぼよ、小百合決めておしまい」喜美が言います。「馬よ」小百合が言うと「あら夜のお勤めも期待できるよ」老婆が言います。「夜の方は子供がいるから激しくない方が」「そうかい。私はキープと」「私も

「二人ともはしたない」「端者より良いよ」喜美と老婆はうなずき合いました。次に登場したのはガマガエルでした。「次の候補はガマガエルです。醜い醜いガマガエル、鏡で己の姿を見てたったりたったりと油を垂らします」猫が言いました。小百合はガマガエルを見て佐竹さんを思い出しました。ガマガエルはゲロゲロと鳴き女性陣はゲエゲエ吐きました。「これはきっと魔法にかかっているのだよ、おとぎ話によく出て来る。キスをするすると魔法が解けて美しい王子に変わる」老婆が言うと「それは人は外見じゃない。中身だと言う話だろう。でも人は外見だよ、きれいな人は素直だし、醜い人は性格が曲がるのが当たり前だろう」喜美が言いました。「どうして」小百合が喜美に聞くと「持てない小説家の本を読んでごらん。回りくどくグズグズとどうでもいいことにこだわってやたらと長い。もてる小説家の小説は話が早い」「それって性格？」「文は人なりだよ」と喜美は言い切りました。「おとぎ話はキスをする人が清い心も持っているかどうかだからキスは人なりだよ」老婆は言いました。「魔法にかかっている保証はありません。ただのガマガエルかもしれません。身体を許すと性格が変わる男はいます」猫が言います。「男にキスを許すとすぐにいい気になるからここは注意だよ、キスだけで済まなくなる。すまないと言って金まで借りようとする。キスできるかい」喜美が言いました。小百合はガマガエルを見ました。見れば見るほど気持ち悪くなり吐きました。「私はガマガエルにキスをするほど落ちぶれていないわ、他にいないの？」「次の候補者は年齢50代、初婚初老の男性です。甘えたい女性には最適かも知れません。会社一筋に勤め上げてきましたが未だに平社員でリストラ候補、それでも結婚願望はあります」猫の説明に小百合はハゲてメタボな冴えない男を見てため息をつきました。「何故今まで結婚をしなかったのですか」猫が初老の男にマイクを向けました。「縁がなく」男が答えました。「そうです。円が無くてユーロが不安定です。円無きユーロはドルにしか無しです。趣味は金融商品運用です。一か八かの人生ならどのポジションを取りますか」「悪くないねえ、私と気が合うかも、女の方が寿命が長いから老後婚に良いかも」喜美が言いました。「小金があるならこの人に決めてしまい。年だからセックスの回数も少ないだろう」老婆が言うと初老の男は精力増進剤を飲みニヤリと笑いました。「初婚だった」「もう少しで定年よ、もし子供が出来て幼稚園に行ったら父親なのおじいちゃんなのといちいち説明しなければならない」「おじいちゃんにしとけば良いだろう」「腹上死でもされたら」「保険金がかっぽり入るだろう。それで暮らせば良い。どうせ金目当てなんだから」喜美の言葉に小百合はこれはありかもと思いました。「とりあえずキープ、他にはいないの」「次は三

十代で年も近いです。でも子供が二人います。9才の男の子と6才の女の子を持つ男性です。現在は両親と祖母と一緒の6人家族です。離婚の原因は妻に逃げられたからです。女性に不信感を少し持っていますが再婚の意志はあります」「女房に逃げられたのはセックスが下手だったかもしれないよ、小さいかそれとも変態プレーを望んだか」「いや両親の介護疲れかもしれない」「6人も暮らしていて私達親子が入ったら何処で寝るのかしら」「私の入る場所が無い駄目、私の老後も考えておくれ」喜美が言いました。「次は若い二十代男性です。時給800円週40時間労働で三万二千円税金引かれて月に十二万に届くかどうかボーナス無し手当無しもちろん初婚です」猫の説明に小百合は「結婚を申し込む収入じゃないわよ、私は子持ちよ、妊娠して仕事を辞めたら十二万でどうやって暮らしていけると思うの」と言いました。若い男の顔はイケているのに生きていけない壁が小百合の前に立ちふさがりました。若い男は壁をよじ登り乗り越え小百合の前で土下座し始めました。「土下座をしています。若者はあなたの事を気に入っているようです。若さの情熱でしょうか、あなたの身体目当てでしょうかこの男性はここで結婚を出来なければ一生結婚出来ないと思っているかも知れません」猫のアナウンスに小百合は土下座も安くなったと思いました。「星の巡り合わせが悪いねえ、正視できない」「止める？若い男はいっぱい出来るよ」老婆は正座して言いました。「これが現実です。あなたは選ばれるだけでも幸せです」猫が言いました。「嫌！これが現実なの」小百合は叫び会場から走り出しました。その小百合をガマガエルと初老の男と子連れの子と若い男が追い駆けてきました。その様子を白馬に乗った王子が見ていました。会場の隅に隠れていた人魚姫は足から血を流しながら痛みを耐え王子を見ています。人魚姫の手に持つナイフは震えていました。このナイフで王子を殺しその血が人魚姫の足にかかれば元の人魚に戻れるのでした。殺さなければ海の泡となって人魚姫はこの世から消えてしまうのです。でも人魚姫は王子を殺す事は出来ませんでした。王子を愛するがゆえに幸せになって欲しい。自分はこのまま死んで海の泡になろうとも構わないと人魚姫は思っているのです。「人魚姫なんてどうでも良いのよ、私が幸せになれば」小百合は言いました。「11時45分」慌てて追い駆けてきた時計が言いました。「12時になると魔法が解ける。早くしないと」シンデレラが馬車に乗りながら言います。「魔法って何よ、私は魔法にかかっていない」と小百合が言うと「あなたがかかっているのは洗脳」と老婆が答えました。「小百合の人生は私の人生、私の思いどうりの道を歩んで欲しい」と喜美が言うと「今ならもれなくみつ子と母親がついてきます」と猫が言いました。「12時を過ぎると

洗脳が解けるの？」「切れるのは賞味期限」「酷い。女を年齢で判断しないで」小百合が言うと「ハイホ～ハイホ～、ハイホハイホ女が好き」と7人の小人が現われました。「40代の美人より10代のブスが好き」「遠くの美人より近くのブスが好き」「赤子泣いても年取るな」「ニュートンはりんごが木から落ちるのを見て万有引力の法則を思いました」「男は女の尻の肉が落ちたのを見て万事休すと思いました」「窮鼠猫を噛む、女は鏡を見て臍をかむ」「カクカクしかじか切がない」7人の小人は勝手な事を言います。小百合は止まりました。「女は選ばれる方が幸せなの？それとも選ぶ方が幸せなの？」小百合は叫びました。「お前は何故人の目を気にする」現われた狼が聞きました。「それは」「お前は何故マスコミを見る」「何故って」「多数決で多い方が正しいから、それが民主主義でしょう」小百合が言うと小百合の背中にドスンと何かが乗りました。小百合が見るとみつ子がおんぶされていました。「ママは多数派の中にいるの？少数派の中にいるの？」みつ子が聞きました。「多数派の中にいたい」「現実は」「こぼれ落ちた。少数派」「私が重い？」おんぶしていたみつ子が段々と巨大化していきました。小百合は巨大化したみつ子を背負い踏ん張ります。「これからどんどん大きくなるわよ、踏ん張りきれぬ」みつ子の問いにふんと鼻を鳴らして小百合は耐えます。みつ子はマッチを取り出し小百合に見せました。「駄目！火遊びをするとおねしょをするわよ」小百合の言う事を聞かずみつ子はマッチに火を点けました。「見える？」そのマッチはマッチ売りの少女が持っていたマッチでした。炎の中にマッチ売りの少女がいます。どうしてこの子は働いているの」「知らない。家庭の事情があるのよ」「どうして誰もマッチを買ってあげないの」「知らない。個人の私情があるのよ」「どうしてクリスマスのご馳走があるの」「知らない。市場があるのよ」男達は小百合に追いつきました。そして一列に並びました。そして口々に「愛しています」「好きです」「幸せにします」「ゲロゲロ」と言いました。「ママ無理をしないで、クリスマスはコンビニで予約して三日まえから店に届いているケーキやオードブルで構わない」「それも買えないかもしれないの」「写真を見ているだけの楽しいクリスマス」みつ子が言うと「まだ気持ちが揺れ動いているのかい」と猫がシーソーの上で言いました。「当たり前でしょう」小百合もシーソーに乗りながら答えました。小百合と猫の乗ったシーソーはぎったんばつたんと上下します。「切った張ったはヤクザの世界、義理と人情を秤にかける男と女、人間社会は複雑怪奇、それは感情があるから、その感情はその時にならなければ誰にもわからない。正しいと思っていることもある日突然間違いになる。全ての人間が幸せになる事はない。全ての人間が不幸になる事も無い。誰かの幸せは

誰かの不幸で誰かの不幸は誰かの幸せになる。人間社会は実に良く出来ている。複雑なればどこかに押し込めると考えているかもしれない。複雑な事を考え単純に実行するのが良い。単純に考えて複雑に実行すると間違いの元になる。やるならやれ、やらないなら近づくなだ。わかるかい」猫が聞くと小百合は首を振りました。「金を手に入れる方法論が問題なんだろう。さて今現在犯罪をしないで金を得る方法は」猫は言うのと等身大の大きなコケシを置きました。「無い」小百合が答えると「情熱や特別の才能は」聞き十数歩歩いてみつ子を置きました。また小百合が「無い」と答えると十数歩歩いて喜美を置きました。「何かの実績か経験は」と聞き「無い」と答えると歩いて過去と書いてある立て札を置きました。また「組織の集団の目的が理解できるか」と聞き「何を言っているかわからない」と答えると未来と書いてある立て札を置きました。「結婚って良く出来たシステムだろう。男がいて女がいる。そこで金と子孫を残すのに感情が揺れ動く、どちらも一人では作れず他の人から提供されなければならない。それが人間社会を複雑にする」「わからない。わからない」「地域自給自足経済に戻れないしかと言ってグローバル企業にも就職できない。ネットで情熱と才能を見せる事も出来ない。資格を取る金も暇も無い。現状にしがみついてしがらみにがんじがらめになる」猫が言うのと置かれた人や立て札から糸が出て五角形の蜘蛛の巣が地面に出来て小百合はぐるぐる巻きで中央にいました。その小百合に向かって男達が巣の端から迫ってきます。「助けて」小百合は叫びました。「助けに向かっているだろう」猫が男達を差して言いました。「お前は再婚したいのだろう。相手も結婚したいのだろう。再婚したいから男達に自分は離婚したと教えたのだろう」喜美が言いました。「私は何もしていない。悪くない」小百合がもがきながら言います。「ママ見て」みつ子の声で見るとみつ子はマッチに火を点けていました。マッチの火は蜘蛛の糸に燃え移りました。その炎は小百合に迫ります。「どうしてパパと別れたの」とみつ子は聞きました。「あの人の会社が潰れて、自営業を始めたけど上手く行かなくて、家にお金を入れてくれなかったから」「自営業をやるのを反対しなかったの？」「それは」小百合はどうして強く反対しなかったのだろうと思いました。「どうしてパパは自営業をやろうと思ったの？」「それは再就職がなかなか決まらなくて」「誰の為に自営業をやろうとしたの？」「誰って、誰の為に」小百合は思い出そうとしましたが、蜘蛛の糸の炎が迫って来て考えられなくなります。「何故二人で協力しなかったの？」「協力？」小百合は自分の身の不幸を悲しいんでいただけでした。「私を悪者にする気、女は

非を認めない」小百合が言うと爆発音がして煙が辺りに立ち込めました。そして煙が消えると小百合に変わってコケシがぐるぐる巻きになっていました。「女は残酷で変わり身が早いよ、女は太古の昔から男が狩や戦争で死ぬのは計算済み、だから女はキスをする時に目をつぶる。瞳がしゃべらないように」小百合は仁王立ちになって言いました。「よく言った。女30熟れ頃、腐って地に落ちる前が一番美味しい。男共、男を見せてくれ！まとめるよ」喜美が言うと男達は横一列に並びました。男達に向かい合って小百合は一人立ちました。「故郷まとめて花いちもんめ」男達と言います。「親戚まとめて花いちもんめ」と小百合と言います。男達が「身体が欲しい」と言えば「タダじゃあげない」と小百合と言います。「相思相愛」「そんなの無理」男達と小百合は花いちもんめが終わるとにらみ合いました。にらみ合いは男達のつかみ合いに変わりました。何故なら喜美が「男達よ、女は突然現われて突然消える物、捕まえなければ誰かがさらって行く」と言ったからです。男達はくんずほぐれずかたまらず、小百合に求愛をする為に殴り合い髪のかみ合いやプロレス技をかけています。小百合も巡り合いを求めて目まぐるしく条件の合う男を捜しています。喜美は「自分で蒔いた種、それとも私が蒔いた種、女は常に自分が正しいと言い張る生き物、何故なら女は一分一秒でも長く生きて行かなければならないから」と男と女の乱闘の中を悠然と歩いていきます。「お母さん助けて」小百合が喜美に言いました。「私はおばあちゃんだよ、孫がいるから、女は孫の世話をする方が男を世話するより楽しい。だから生きなければならぬ」喜美は走り寄ったみつ子の手を握りました。「ママ悲しまないで、ママが悲しむと私まで悲しくなる。ママの人生は幼い私の人生全て私はこれからどうなるの？物を作って売れば良いけれどこれから先の未来は物が売れるの」喜美に手を引かれながらみつ子と言いました。「未来は誰にも判らない。選択肢や保険が多い方が良いのはわかっているけど決められない。わかっているのは私の大事な宝物はみつ子よ」小百合はそう言いきつ子に駆け寄りみつ子を抱きしめました。喜美も涙を流しながら二人を見ました。みつ子は抱きしめていた小百合の腕を振り解き「止めて！争わないで、私が悪いのなら私が死ねばいいのだから、私が死ぬから争いは止めて！」と叫びました。「みつ子！」小百合は再びみつ子を抱きしめると「決めました。選びます」と言いました。すると男達の争いは止み闇の中の静けさになりました。「結婚を前提にお付き合いします」小百合が宣言するとドラムロールが鳴り響きました。「さあ運命のドラフト、小百合の一位指名は誰でしょう。転がる石にコケはつきません。新しい運命が始まります。誰がサテスファクションできるか注目の一瞬です。」猫が何処から

とも無く現われ言いました。スポットライトが男達を映し出します。「解説の喜美さんはどう予想されますか」放送席に移った猫が隣の席の喜美に聞くと「実の娘で手前味噌ですがまだ充分イケルと思います。ハズレは選ばなと思います」と喜美が答えます。「ハズレと言いますと」「見た目です」「やはり顔は大事だと」「ええ、最低限人間であって欲しいです」「ゲストのみつ子さんはどうですか」「コールドチェーンに勝てそうな人」「離婚は遺伝すると言いますがこの連鎖を断ち切れるか」ドラムルールが止みました。「さあ発表です。心の病も止むか」猫の実況に男達の視線は小百合に注がれました。スポットライトも小百合に注がれ小百合は黄昏ました。砂鱈の様に砂にうずくまりたい心境です。でも加齢は待ってくれません。小百合は意を決し「佐竹さんにします」と言いました。会場はどよめきました。小百合はよろめきました。男達はあきらめました。そして佐竹はときめきました。「佐竹？誰？」喜美とみつ子は見詰め合いました。「おっとこれは予想外、波乱万丈皿屋敷、皿が割れても嫁入り道具は割れ物一つあれば良いでしょうか？指名されなかった男達は肩を落として、いや落としていません。次の相手を探して追い掛け回しております。さすが一時間に一千万個出来る精子の力です。佐竹さんに金と精子を注げる時が来ました。佐竹さん！佐竹さん」猫が呼びかけると佐竹が舞台に進み出ました。佐竹は歩く姿もちよろちよろして意味も無く後ろを振り向きます。でも何かを見ているのでは無いみたいで物にぶつかります。ぶつかると自分が酷い衝撃を受けたのを他人に知って欲しくて大きい声で痛いと言います。「佐竹さん今の心境を」猫が佐竹にマイクを向けますが佐竹は答えませんでした。「緊張しているようです。佐竹さん。今のお気持ちを聞かせて下さい」猫が聞くとしばらく考えてやっと「嬉しいです」と佐竹は答えました。猫は佐竹とのインタビューを止め小百合にマイクを向けました。「今のお気持ちは？」「再婚だからそんなに嬉しくありません。結婚式も挙げません。人は気の迷いと言うかも知れませんが現実を受け入れるならこれも一つの手です」「かなり迷いましたか」「誰が人の気持ちをわかるでしょう。その時のその人の立場にならなければその人の気持ちはわかりません。知った顔をしてどんな顔をしてドヤ顔で言われたくありません。私の気持ちは私しかわからない。その気持ちも私自信にもわからない」「複雑怪奇な人間の心ですね。最後にコケシの意味は」猫が言うと小百合は「ご想像にお任せします」と言いました。そして結婚行進曲が流れました。するとスポットライトに照らし出され便器が浮かび上がって来ました。便器は「穴の穴を見せるのかい」と言いました。「ママ！トイレ」みつ子が便器に駆け寄ります。「駄目！行っちゃ駄目！」「一人で出来るもん」みつ

子は小百合が止めるのも聞きかす便器に近寄り便器の中を見ました。「ママ！来て、早く来て」みつ子は小百合を手招きます。小百合が便器に近づき便器の中を覗くとそこには生まれたばかりの佐竹似の赤ん坊がいました。赤ん坊は目を開けました。そして小百合を見ると「僕生まれて来て良いの？」と聞きました。

小百合は布団から飛び起きました。そして辺りを見回し夢だったとわかりました。横にはみつ子が寝ています。嫌な夢だなと軽い疲労感を感じました。ああとため息をつくとき携帯電話がメールの着信を知らせていました。小百合は携帯を開けるとそれは佐竹からのメールでした。小百合は読む気になれずに携帯を閉じました。小百合は今日もまた嘘をついて生きて行くと思うと気が重くカーテンを開ける気にもなれませんでした。

終わり